



# 挑戦

第2号

発行日 平成4年8月1日

発行者 基礎電気工学講座新聞委員会

## 第2号発刊にあたっての挨拶

講座主任 吉村 昇

研究室を巣立って行った卒業生・修了生の皆様には元気に各分野にて活躍されていることと思います。暑い季節に入りますので、体には十分気を付けて精励されますことを切に願っております。

本年度研究室も人事の移動が在り、長年苦楽を共にしてきました西田講師が情報工学科へ移り、高橋技官は定年規定により退職となりました。西田先生には新しい学科にて益々活躍され、立派な成果の挙げることを、高橋

さんには健康な毎日がくることを祈っております。

新たに私共の仲間に4月1日付で加わったのが佐藤忠雄技官です。応用電気工学講座からの移籍です。10数年前に当研究室に居りましたので、出戻りとなります。これから苦楽を共にすることになります。研究室の新しい歴史のスターティングポイントとも思っております。最後に西岡委員長をはじめ、研究室の新聞委員の諸君に改めて御礼申し上げます。

特集 インタビュー  
テーマ：10周年を迎えて

吉村研究室が昭和 58 年にスタートして、今年で 10 周年を迎えることとなりました。その間この研究室から、多くの卒業生・修了生を輩出しました。そこで、吉村先生にこの 10 年間の思い出や今後の抱負についてお話を伺いました。

スタート当時について

吉田：スタート当時のお話を伺います。

吉村：最初（昭和 58 年）は、院生が 1 人と学部生が 5 人、それに私と西田先生と高橋さんと計 9 人でスタートしました。絶縁材料の放電劣化と電気伝導・破壊の研究ができるような研究室でスタートしました。ですから、トラッキングやトリッキングが主体で、それだけに研究費がまわっていませんね。将来は、院生 8 人・学部生 10 人と留学生や研究生が 2~3 人で、教職員を入れて計 25 人ぐらいの研究室をつくるのが目標でした。研究費は、最初は赤字でしたが、一千万ぐらいにしたいと思っていましたね。

現在の研究テーマについて

吉田：現在の研究テーマについて一言お願い致します。

【セラミックス】

吉村：最初は、絶縁材料だけだったのですが、新しいテーマをやりたいということで始めたのがセラミックス材料です。その中でも、誘電体セラミックスの研究から始まりました。非常に幸運なことに TDK がすぐそばにありましたから、設備とか研究費で大変な援助を受けまして、この研究ができるようになったわけです。

なぜセラミックスを始めたかと言うと、有機材料ですと、どうしても化学屋さんが合成した材料をもらってきて、試験するという受身の立場の研究であるわけですが、セラミックスの場合、自分達で材料を作ってその特性も明らかにすることが出来るという楽しみがありますから。また、将来的にも面白いものができる可能性がありセラミックスを始めたわけです。

[ 画像処理及び計測 ]

吉村：これを始めたのは、絶縁材料の流れからきているわけですし、絶縁材料に関して

大きなテーマ、例えば博士論文を取れるようなテーマがなかなかないという事で始めたのが、絶縁の話とコンピュータをドッキングさせた研究ですね。材料屋にとってコンピュータは苦手なものですから秋田高専の柳原先生に来て頂いて画像計測、そして我々は絶縁破壊で、これらを結び付けたわけです。日本で最初に我々が始めた研究で、いろいろな意味で評価を受けています。また、アキタ電子と共同研究をしています。

【バイオ】

吉村：今から 6 年ぐらい前に、県の人の紹介で、酒造組合にセンサについての講演に行ったのがきっかけです。最初はお酒造りにセンサを使って自動化できないものかと始めました。しかし途中で酒造組合の方から、常温で何とか殺菌できる技術はないものかと頼まれまして、それで磁気で殺蒸を試してみようかというのがそもそものきっかけです。



10 年間の出来事について

吉田：次に、印象に残った生徒や出来事について伺いたいと思います。

吉村：今までかなりの学生を育てているわけですがけれども、第 1 号の卒業生が頭にあるね。自分が教授になって始めて出した卒業生はね。

鈴木：また、人数が少なかつたからアットホームな感じだったんですか

吉村：貪乏だったけど楽しかったね。そんなに忙しくないしね。2 年目は学科主任やって、はじめて教授は大変だと思ったよ。

西岡：鈴木先生、当時の他の講座から見た基礎電気の印象は？

鈴木：すごく真面目だったですね。そこだけ雰囲気の違いでしたからね。

吉村：今でもそうじゃないの？今はそうでもないか。

鈴木：昔に比べれば雰囲気が変わったと思います。

吉田：話は変わりますが、吉村先生と西田先

生は二人ともアメリカに行ったことがあると聞きましたが、そのとき、研究室はどうしたのですか？

吉村：完全になら空きですよ。西田君は1年間アメリカに行っていて、僕は夏休みに家族とアメリカに行っていたんですけど、その夏休みの間は誰もいないから院生3人に後を託して行きました。僕がこっちに帰ってきて今の技官の佐藤先生（当時応用電気講座技官）が、夏休み中は院生がきちんとやっていたと聞いて非常に嬉しかったですね。やっぱり日頃の教育が大事なのだと思ったのが印象ですね。人を育てるのが楽しみだね。また、将来どう育っていくかね。

#### 学会について

信平：学会の会長をやられています、例えば昨年の素材物性国際会議のことについて伺いたいのですが。

吉村：国際会議やるのは大目標でした。これをやるにあたっては、苦労したという記憶は特にないですね。ただ、大学の先生だから学会招致というのは大事ですね。若い先生達や学生の皆さんに刺激を受けてもらって、研究が伸びていくのは一番の活動目的だから、これからも続けていきたいと思っています。まあ、国際会議では秋田弁の英語を喋って、家でビデオを見て家族のみんなに笑われちゃって。

西岡：多くの学会に出られていると思いますが、その時の思い出とかありますか。

吉村：中国で開催された学会で、西田君と柳原先生と3人で行ったとき、僕と柳原先生は中国人と間違えられ、西田君だけ日本人でした。久々に外国に待ったのが中国だったから思い出深い。



#### これからの吉村研究室について

西岡：今後10年間という、これから着手したいテーマとかはどうですか？

吉村：もう今のテーマでね、もうこの研究室の場合テーマは広げすぎちゃってるから、あとは深く掘り下げて、学会にいい論文を

書いていけばいいんじゃないかと思っていますよ。これ以上上げるつもりはないですね。

吉田：研究テーマは、企業の景気に左右されるものですか？

吉村：一部は左右されるけど、研究室のメインテーマがありますから、何がメインだということをつかなくてはならないね。やはり僕のやってるセラミックスや有機材料などの材料関係と、鈴木君のやってるコンピュータ利用の分野がメインで、後は産学共同研究でときどきテーマが変動するけど。

西岡：吉村先生からみた鈴木先生の印象は？

吉村：僕から見ればこの人は、文武両道バランスの取れた人ですよ。ただ、誉めるだけが能じゃないからね。将来のことを考えれば、白衣を着て実験をして欲しいというのが私の本心ですね。

まあ、3年間は手伝ってくれと私も勝手なことを言っているのだけれども、これから先は外国に出てもらって勉強して、その後がたぶん勝負だね。This is 鈴木と言うテーマがあるかどうかそれを自分でつくっていくということね。

吉村：何とか10年もったね。僕も48だから、10年ぐらいが一番花かな。大学の教授としては、この後研究室を如何につないでいくかというのが自分の仕事だと思うけど、やっぱり若手をちゃんと育てていかないね。そのためには、良い環境と魅力のある研究テーマがないと人が育たないから、できるだけそういうふうにしたいなと、これから10年間は。

インタビューを通じて、若手の育成という言葉が非常に印象に残りました。若手もそれに答えるべく、これから頑張っていきたいと思います。

ゲスト：吉村 昇

聞き手：鈴木雅史

西岡貴輝

信平清隆

吉田有子

Photo：平出絵美

平成4年6月8日（月）収録

10周年特集  
卒業生アンケート

吉村研究室 10 周年特集その 2 として基礎電気工学講座卒業生の方々にアンケートに回答していただき、それをもとに特集を組みました。名づけて「研究室の足跡」。このアンケートに対して 6 人の卒業生から返答がありました。お忙しい中どうもありがとうございました。先輩方はどのような研究室生活を送っていたのでしょうか。それではさっそくいってみましょう。

### 1. 当時の研究室の印象について

明るい人が多くて楽しかった。テニス、スキーなどスポーツには多くの人に参加し、まとまりのあった研究室であったと思います。

装置類や、パソコン等の設備も充実していて恵まれた研究室であったと思います。

ハイポテンシャルを持ったメンバーで、研究も非常にアクティブ、さらに設備もバツペリというところでしょうか。

- このへんは今も変わらず、恵まれております。



家族的な雰囲気の中にも、研究に関しては厳しい一面もありました。その頃の研究テーマは高分子材料の耐トラッキング性に関するものや PTC や超伝導材料等セラミックス関係、トリーの画像処理など多方面に渡っており、ゼミや実験を通して比較的広範囲の知識を得ることが出来ました（以下略）。

- なかなかあまじめな意見でした。でも今は PTC や超伝導材料はやっていませんが、その代わりにバイオなど新しいテーマがたくさん出てます。

実験と称して徹夜で三国志、大戦略（注：パソコンゲームのこと）をやっていたこと。本当に徹夜して、朝（といっても AM11:00 ごろ）実験室で寝ていたら、現在の上司である部長さんに声をかけられて目覚めたこと。

- すごい。今はこういう奇抜な人はいない．．．と思います。多分。

狭い部屋に頭脳がうごめいている（？）。24 時間いつでも学生がいた。

現在 M2（注：大学院 2 年のこと）の N 君（注：編集長のこと）の机が．．．きたなかった。

- 編集長はこの件に関して、依然として沈黙を保っている（一意はない）。



### 2. 講座在籍中で特に印象的な思い出等について

初めてのゼミ合宿で大酒を飲み先輩に迷惑をかけてしまったこと。

しいたけ栽培用のホダ木を一階から研究室（3 階）まで運んだこと。

昼休みに西田先生の誘いを受け、ジョギングを始めたこと。

おいしい日本酒が飲めたこと。

- ジョギングの話は初耳でした。西田先生に聞いたら昔はよく走っていたそうです。

お金がない時で、思うように買えない時に、実験に必要なものをゴミ捨場から拾ってきたものです。また、どうしても買いたいものは、しつこく先生にお願いしたものでした。今の学生さんも見習ってもらいたいものですね！

- なかなか貴重な意見でした。吉村研究室が始まった頃のお話だと思います。それにしてもどんな物を拾ってきたのでしょうか？

12月も師走の頃、細胞融合の実験がうまくいかず、「これでは卒論が書けない！」と悩んでいました。と、そんな時、当時 M1 の先輩が、「悩むよりも、現実を直視して、客観的に事象を把握し、打開する努力をするべきだ！」と、叱ってくれました。年が明けて 1 月 4 日。ようやく夢にまで見た融合の瞬間を捉えることができました。僕は、今でもその時のことを思い出します。

—なんと感動的な話なのでしょうか！！  
しかし卒論はこうなる前に終わらせたいものですが・・・実際はそうもいきません。

粉末を恒温槽を用いて乾塊していたところ、エタノールが自然発火して恒温槽が燃えてしまったことです。無理なこと、危険なことはやってはいけないなとその時感じました。

404 実験室のボヤ騒動といったら、エントレスレインが印象的（？）。

実験で、交流 22k 程度の電圧を使用したが、今から考えると、離隔距離も十分ではなく、よく無事であったと思う。

- みなさん、実験には十分注意しましょう



3. 10 周年を迎えるにあたって一言お願いします。

吉村教授 10 周年ほんとうにおめでとうございませう。15、20 周年とさらに研究室が発展していくことを願っています。

基礎電気工学講座 10 周年おめでとうございませう。研究室に在籍する学生数も年々増えているそうで、基礎電気工学講座の今後ますますの発展を期待しております。

10 周年とな、聞いたただけでおじいさんになってしまった感じがします。つまり研究室もそれだけ年をとったということで、培われ

てきた伝統の深さというものを感じざるを得ませう。

基礎電気工学講座のよき伝統を守りつつ更なる飛躍をお祈り致します。

- 激励の言葉の数々、どうもありがとうございました。我々在籍生も基礎電気工学講座の名に恥じぬよう、がんばっていききたいと思ひます。



#### 4. その他

最近では研究室にお邪魔する機会も少なくなり、秋田大学や基礎電気工学講座に関する情報は、「北光」と薫塵新聞「挑戦」ぐらいしかありませんので、昨年講座新聞が届いたときには非常に懐かしく思ひました。

- ありがとうございます。この新聞を楽しみにしている人がいてくれるということは、我々にとっても励みとなります。この新聞がずーっと続いてくれるよう、来年の編集部に期待しましょう。

アンケートに協力して下さった方々  
下津 昌紀 様 系井 正志 様  
山崎 雄二 様 水戸部 一孝 様  
匿名希望 2 名

ご協力ありがとうございました。



## 素材物性学会国際会議開催

平成3年11月5日～7日の3日間、秋田ビューホテルにて、日本素材物性学会と秋田大学鉱山学部の共催のもと、素材物性学会国際会議（International Conference on Materials Engineering for Resources：略称ICR'91 AEITA）が開催されました。秋田県では初めて開催された国際会議で、英語での講演による緊張と新しい研究分野を追求しようとする活気とが会場に漂い、我々も肌で感じました。

この会議は、平成2年に誕生した日本素材物性学会を中心に、先端技術に不可欠な新素材の性質を電子・分子・粒子の立場から解明し、さらに新しい基礎・応用研究分野の追求を目的として企画されました。

外国から多数の招待講演があり、国別発表件数と参加者数をまとめると以下ようになります。

参加国	発表件数	参加者数
アメリカ	7	
韓国	5	
中国	3	
フランス	2	
カナダ	2	
オーストラリア	1	
フィンランド	1	
イタリア	1	
ドイツ	1	
小計	23	29
日本	69	約370
合計	92	約400

11月4日には、前夜祭としてレセプションが出席者130名と盛大に開催されました。第一日日にはオープニングセレモニーが行われ菅原拓男実行委員長の司会のもと、吉村昇組織委員長の挨拶に続いて、新野直吉秋田大学長の歓迎の挨拶がなされ、3日間の日程がスタートしました。また、プレナリーセッション（基調講演）では、7件の招待講演が行われました。

その後、2日間にわたって37件のキーノー

トセッション（展望講演）が行われ、そのうち外国人招待講演が21件ありました。最終日にはポスターセッションによる48件の論文発表が行われ、閉会式にはその内の6件に優秀論文賞が授与されました。この3日間でのべ808名（初日は320名）の参加者があり、会議と並行して開催された展示会の製品も、参加者の関心を集めていました。

次回の開催は、4～5年後に予定されています。さらに発展した会議となっているでしょう。

## センサ工学研究会の移り変わり

センサ工学研究会は今年で7回目を数えることになりました。過去6年間で多くの人に参加するようになり、この研究会も規模の大きなものとなりました。第1回は、大学・高専関係者だけでしたが、2回目以降から県内企業の参加があり、現在では年1回ですが、我々も新しい理論や技術に触れることができるようになりました。

当初からの発表テーマを見ると、数回にわたって報告されたものもあり、また材料に関するテーマでは、セラミックスの研究が毎年報告されています。テーマの変遷を見ると、実験主体のテーマとコンピュータ主体のテーマとがはっきり分かれていたのが、最近では実験した結果をコンピュータで解析するという吉村先生の方針が打ちだされたテーマが多く発表されていると思います。

我々は、発表内容に目を向ける前に、開催場所について興味を示します。研究会という以前にバカンスという考え方をする学生が多数です。やはり仕事をした後解放感に浸れるのも、この研究会の醍醐味のひとつではないかと思っています。いろいろな場所を開催地として選んで下さる企業の方々に深く御礼申し上げます。

今後も、様々な場所で、様々な内容の研究が発表されることと思います。我々もこの研究会のお役に立てるよう努力するとともに、ますますレベルの高い研究会に発展することを望んでいます。

## 研究報告

吉村研究室のテーマの一つを担うバイオエレクトロニクス。この研究内容を改めて再確認していただこうと思い企画しました。バイオは現在、4年次3名と、M1M2各1名の計5名が、それぞれのテーマに取り組んでいます。今回はその中の“磁気による清酒の殺菌法”について簡単にまとめたものを掲載してみました。少しでもバイオに関して理解していただけたら幸いです。

清酒醸造の過程で行われる火入れは、醸造細菌の滅菌及び種々の酵素の不活性化をもたらす優れた滅菌法として用いられてきた。しかし、この火入れは醸造でかもしだされる“清酒としての旨さ”を損なう他、微量の酵母、火落菌及び火落性乳酸菌が残存するために、熟成、保存期間中での清酒の変敗は免れなかった。一方、清酒としての旨さを保つため、火入れをしない限外濾過滅菌も行われているが、設備費用がかかること、また除菌及び酵素の不活性化が完全でないことから、店頭で冷蔵庫を設置しなければならないこと等の問題がある。

そこで、火入れ、限外濾過に代わる清酒の滅菌法として、磁気による殺菌法の研究が4年前から当講座で行われている。当初は磁気のみによる殺菌が試みられたが、その後、フェライトを用いた磁気殺菌に切り替えられ、昨年は県醸造試験場にプラントを設置するに至った。

フェライトを用いた殺菌法とは、スチレンアクリル樹脂でコーティングした粉末フェライトを清酒中に添加し、それを直流磁場間で上下振盪させることによりもたらされるフェライト粒子の物理的な流動力で、最近を破壊するというものである。

試験管を用いた基礎実験による酵母の殺菌効果は既に立証されているが、殺菌の遅効性

等多くの課題が残されている。現在はそれらの問題に取り組む傍ら今年9月に新設予定のプラント2号機の設計を行う等、実用化に向けさらに研究が続けられている。

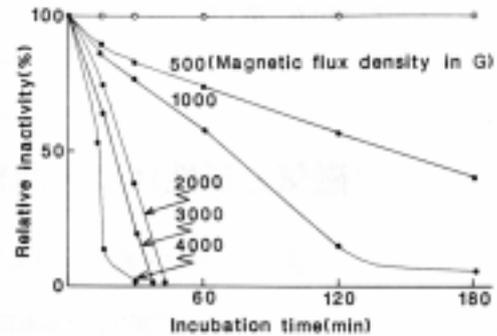


Fig. 1. Effect of magnetic flux density in the presence of ferrite on Kyokai no. 7. Ten ml of yeast suspension containing  $10^6$  cells were shaken at a speed of 30 rpm (15 cm up-and-down motion), at 28°C under the following conditions. Symbols: ○, controls (no ferrite without magnetic flux, 4000 G without ferrite, and 6 g of ferrite without magnetic flux); ●, 500, 1000, 2000, 3000, and 4000 G with 6 g of ferrite.

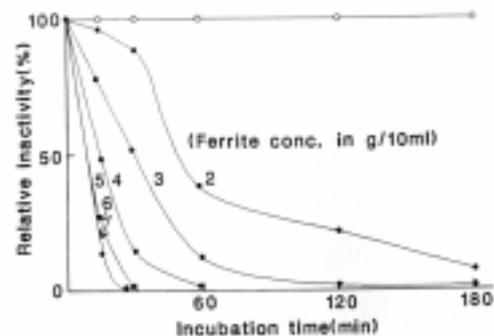


Fig. 2. Effect of ferrite added in various concentrations with magnetic flux on the viability of Kyokai no. 7. Experimental conditions were the same as Fig. 1 except for 2000 G. Symbols: ○, see Fig. 1; ●, the numbers show the amount of ferrite (g) added in to the yeast suspension.

## 現在の研究状況

現在我々は、以下に示す研究テーマについて、それぞれ従事しています。やはり電気材料の研究室だけあって、材料に関する研究が最も多く、最近テーマ数が増えてきた、コンピュータを用いた内容が続いています。バイオやマイクロメカトロニクスは、今後の発展

が期待されるでしょう。

### 研究テーマ

電気材料工学：12人

計算機利用工学：10人

バイオエレクトロマグネティックス：5人

マイクロメカトロニクス：2人

センサ応用光学：1人

## 近況報告

( 昨年 of センサ研から暮れまで )

昨年 of センサ研・夏季ゼミが終わった頃から、4年生は卒論や修士の入学試最に、院生は修論の実験に向けて、不安を募らせ緊張感を持続させている毎日でした。そういった意味から9月は月例の飲み会がありませんでした。それだけに不満を解決するよりどころとして、酒を求める者が多かったのではないかと思います。しかし、その不満は10月のボーリング大会で消えたのではないのでしょうか。ただ、この大会は応用電気講座との対抗戦であったため、新たな敵の登場に人々の目は血走り、疲れを誘ったのではないのでしょうか。幸い優勝杯は、本講座の鈴木雅史先生が獲得したため、乱闘騒ぎはありませんでした。これからもお互いに良いライバル(ボーリングの面)であればいいのですが。今年はどういう結果になるでしょう。

11月には秋田で初めての国際会議が開かれ、いつもと違う雰囲気戸惑うばかりでした。国際会議については別項を設けてありますのでそちらをご覧ください。

やはり話を飲み会に戻したいと思います。カラオケ大会が開かれたのはこの時期でした。先生方、先輩・後輩の奏でる歌声に、皆聞きほれていました。イベント事になると洒が弱くなる人もいるもので、この時も酔いつぶれた者が多数でした。

暮れもそろそろ押し迫る頃、卒業生の慌ただしさは最高潮に達していました。そんなとき、吉村邸で開かれた忘年会は、彼らの不安を癒す一服の清涼剤となったことでしょう。

( 暮れから卒業まで )

ゆく川の流は絶えずして、しかも、もとの水にあらずなどとはいへど、この時期、せめて一か月ばかりも戻りしこと望む者多きと思われり。新年のめでたさも明けやらで、つれづれなるままに、日暮らし装置に向かひて“結果でねー”などと、のたまう者そちこちに見られれば、“ああ、かの人と同じなりけ”と無意味に安堵す。

二月に入りて、こと順調に論文を書き綴るM2を後日に、4年の子どもあれやこれやと怪しげに勤めき。マウスを片手に“よーっしゃよっしゃ”“えーっどうして”とパソコンに語りかけし者、マニュアルのカメラを持ち

て首を傾げる者など、様々あり。ある人二日三日姿見えず、何故かと親しき者に問へば“かの人いましがた帰れり、昨日の夕方よりずっと在りき”といらふ。これに見らるる24時間体制も、この季節の風物詩と思えば、また、いとをかし。卒論発表も近くなりて、早朝より練習の声、呪文のように聞こえるもをかし。

発表終わりて、コンパなどの連なりたる日々あれば、時、瞬く間に過ぎ、気がつけば三月も半ばを過ぎんとす。卒業式を向かえし後、人一人、また一人と研究室より去りて行きしこと、いとわびしくあはれなり。さらに、年度末を迎え、電気学会などありてMIも去りければ、研究室の人口密度も低くなり、一人二人の話声、さらでも大きく聞こゆる、いみじうあはれなり。

( 講座開きからセンサ工学研究会まで )

この新聞の吉村先生の挨拶にもあったように、今年度教職員で西田先生が情報工学科に移籍し、高橋先生が定年退職したため佐藤先生が技官として来られました。

4月6日に4年生が講座に配属となり平成4年度基礎電気工学講座がスタートしました。顔合わせではみんな緊張気味に自己紹介をして、とても静かな雰囲気でした。しかし、ふたを開けてみると、ツブ全く不揃いの林檎達で、当人達が一番びっくりしていたのではないのでしょうか。

それからの4・5月と、大きな変化はこれといってなかったのですが、6月1日付で秘書の山崎さんが来られて、みんな喜んでおります。そして7月に入り、第1関門の進路決定に向けて就職活動も活発になってきて、やっとの思いで選んだ企業へと元気いっぱいに出かけております。就職が内定するまでは不安な毎日が続くことでしょう。また、進学希望者は合格を掴むために、日夜勉強しております。

7月には昨年と同様に韓国から李先生と短期留学生が来られました。歓迎会として屋上で焼き肉パーティーが開催される予定で、おいしいビールを思いっきり飲もうと、今から気合いが入っている人もちらほらいます。

まだまだ、講座のイベント事はこれからが本番であります。そして、メインイベントの卒論・修論に向け、これから日々頑張っていくつもりです。

基礎電気工学講座  
平成四年度年間行事予定表

学生代表の一言



基礎電気工学講座  
学生代表 渡辺 茂

本講座を卒業されました諸先輩の皆様お元氣でご活躍していることと思います。昨年、発刊され好評でありました基礎電気工学講座新聞“挑戦”で研究室の現行を詳しくお知りになった事と思いますが、本年度の吉村研究室で日夜研究に励んでいる堀の中の面々？達の様子を紹介いたします。

講座のメンバーは、大学院2年7名、大学院1年6名、4年生15名、研究生として企業から2名、計30名であります。さらに7月には、韓国から研究生を2名迎え、大所帯で所狭しとひしめいている状態ですが、未知のこと、より難しい目標にむかって各々が研究に励んでいます。

研究分野は非常に多岐にわたり、磁気を利用した生物磁気工学やゾル・ゲル法、セラミック電池に関するセラミック工学、シミュレーション、画像計測、リモートセンシングに関する計算機利用工学、マイクロメカトロニクスに関する研究などがあります。少ないながら電気絶縁、高電圧に関する研究も続いています。新しいテーマとしては、“魔法の油”と称する電気粘性流体に関する研究もあります。学会での発表や論文の投稿など、活発な活動をおこなっています。また、高度先端技術のテーマに対応するため装置の更新と配置替えが進み、非常に恵まれた環境下で研究をおこなっており、研究室内の雰囲気もずいぶんと変わってきています。

本年度、新しく佐藤忠堆先生をむかえ、研究室の伝統を大切にし、さらに高度化する技術や研究目的を達成するため講座全員が努力に努力を積み重ねてまいりたいと思います。先輩方々のご指導、ご鞭達をよろしくおねがいいたします。

4月	四年生講座配属
5月	研究討論会開始
6月	研究生・秘書歓迎会 (6月2日)
7月	韓国研究生来校 屋上焼肉パーティ
8月	センサ工学研究会 (8月4, 5, 6日) 【金浦町】
9月	大学院入試
10月	吉村杯争奪 ボーリング大会
11月	カラオケ大会
12月	冬期ゼミ 忘年会
1月	新年会
2月	卒論・修論締切及び発表
3月	卒業式



## 卒業生紹介

今回の卒業生紹介は、昭和 60 年度修了生の伊藤淳氏にお願いしました。伊藤氏は現在福島高専の電気工学科の助手として活躍されております。

福島高専 伊藤 淳

吉村研究室の皆様、そして、同窓生の皆様、元気に御活躍のものと存じます。

新聞委員会の申し付けで、原稿を書くことになってしまいました。高橋さんや、船木さんといった大先輩がいらっしゃるのに、心苦しく思っております。

私、昭和 60 年卒の伊藤と申します。現在、福島高専の電気工学科に勤務しております。福島高専と申しまして、福島市にはありませんで、いわき市というところにあります。いわき？どこそれ、とお思いの方もおいででしょうが、小名浜、常磐ハワイアンセンター（現在スパリゾートハワイアンズと名称が変わってしまいました）といえ、おわかりいただけるかもしれません。

故郷秋田を離れて、6 年目を迎えました。月日のたつのが早いことにあきれております。もう 30 才になったのかと思うと、驚きです。いわきは、海あり、港ありと、秋田と似た所があります。ただ、雪は降らず、暮らしやすい所ではあります。また、太陽が海から昇るという点も違います。私としては、冬の雪も良いな、そして、海に沈んでゆく太陽の方が良いなと思うのですが、いかがでしょうか。お暇な時は、いわきの方へもどうぞ足をお運び下さい。

さて、今年は吉村研究室が創立して、10 年がたつそうです。私が在籍していた頃は、絶縁・誘電材料の研究が、中心でしたが、年とともに研究分野が広がり、パイオやマイクロメカトロニクスといった研究まで行っているそうです。大学院生の人数も急増して、研究室はかなり充実しているようです。当時大学院生は船木さんしかいらっしゃらなく、電気工学科としても 2 人だけでした。私の時も、他に 1 人しかいませんでした（もう 1 人とは、実は鈴木先生なのですね）。研究室の人数も 10 人程度だったのが、20 人以上も在籍しているというので、すごいもんだと感心しております。

設備の方も、以前からは予想もつかないほど、いろんな装置があります。ますます、魅

力のある研究室になっておりますので、何かの機会に訪れてみてはいかがでしょうか。

最後に、吉村研究室のますますの御発展と、同窓生の皆様様の御健勝をお祈り申し上げて終わりにしたいと思います。

## お知らせ

本年度で、吉村研究室は 10 周年をお陰様で迎える事になりました。

そこで、平成 5 年 6 月頃に吉村研究室 10 周年記念祝賀会を予定しています。詳細につきましては後日連絡致します。

10 周年記念祝賀会実行委員

鈴木 雅史 昌子 智由  
佐々木芳宏 渡辺 茂

## 編集後記

編集作業もやっとのことで終わったと思えば、編集長にはまだ最後の仕事が残っていました。編集後記の作製です。昨年の編集委員長はどうまく書けませんが精一杯書きましたので皆さん最後まで読んで下さい。今回はスキャナというハイテク機器を用いました。出来、不出来は別にして、新しい試みに拍手を送っていただければ幸いです。掲載できる記事が多いこともあり、今回は幾分充実した内容になっているのではないかと思います。皆さんはどの様に感じていただけたでしょうか。今後どの様に発展するかわかりませんが、次からは読者として“挑戦”に接していきたいと思えます。

最後になりましたが、御協力下さいました講座の人や卒業生の方々に、厚く御礼申し上げます。有難うございました。

基礎電気新聞委員会

顧問 鈴木雅史助手

編集委員長 西岡貴輝 (M2)

副委員長 信平清隆 (研究生)

吉田有子 (M1)

編集委員 黒崎秀彦 (E4)

吉田靖治 (E4)

題字 高橋重雄元基礎電気講座技官筆